中央大学

2022/4/30

中央大学学員会 中大技術士会支部
ニュースレターvol.54

会員の皆様へ

早いもので 2022 年も 4 か月以上経過致しました。その間に全世界は大きく動いています。新型コロナウイルス収束の兆しが無いまま、ウクライナ情勢、石油高騰による物価高、さらに急速に進む円安。暗いニュースが飛び交う世の中になっています。しかしそれでも時は進みますし、季節は流れて行きます。我々技術士はどんな時でも問題解決意識を持って、活動して行きたいです。

本会では会員の皆様からの投稿をお待ちしております。中大技術士会のホームページ(http://www.chuo-u-pej.org/)から投稿用のフォームをダウンロードしていただき、投稿してみてください。それではニュースレターをお楽しみください。

内　容	ページ
巻頭言	2 ページ
■ **「コロナ禍での修士論文発表大会」** 小林　進副会長（情報工学部門・総合技術監理部門）	2 ページ
活動報告	3 ページ
■ 幹事会報告	3 ページ
■ 大学支援部会活動報告	4 ページ
■ 広報部会活動報告	4 ページ
活動計画	5 ページ
■ 大学支援部会活動計画	5 ページ
■ 企画部会活動計画	5 ページ
リレーエッセイ	5 ページ
■ **「あれから、かれこれ 40 年・・・」**：飯村信夫さん（S60.3 理工学部土木工学科卒、建設部門）	5 ページ
投稿エッセイ	7 ページ
■ **「創作昔話「新田開発骨折り物語」始まりー始まりー」** 中大技術士会幹事 山下 三雄さん （建設部門・総合技術監理部門）	7 ページ

巻頭言

「コロナ禍での修士論文発表大会」

中大技術士会副会長　小林　進（情報工学部門・総合技術監理部門）

2022 年 2 月 26 日、電気電子情報通信工学の修士論文発表会で同窓会賞の審査を行うために、久しぶりに後楽園キャンパスに足を運んだ。この審査を通して私が見た母校のコロナに対する取り組みの一端を紹介し、「with コロナ」中での母校への支援の在り方について述べたい。

ここ 2 年間、コロナの影響により発表者と教職員以外は会場に入れなかったため、同窓会賞の審査を中止していた。そのため、今年度の開催は「まん延防止等重点措置」発令期間中のため、同窓会賞の審査が行えない懸念があった。しかし、担当の先生より「緊急事態宣言が発令されない限り、通常通りに行う」との心強いメールがあり、9 名の審査員が参加して、2 年振りに審査を行うことができた。修士 2 年の院生 45 名の発表者が 4 教室に分かれ、午前中 29 名、午後 16 名、発表 14 分、質疑応答 6 分で行われた。各会場に 2 名の審査員（1 会場のみ 3 名）が入り、発表内容、聞きやすさ、発表態度など 6 つの評価項目に基づいて審査を行い、同窓会賞として各会場から 2 名選出した。会場になった 6 号館 3 階の教室の天井には Web カメラ、教卓にはオンライン講義用のノートパソコンが設置されており、音響設備とノートパソコンの電源を入れるだけでオンラインでの講義が行える環境が整っていた。これまで技術士制度を紹介するために神奈川県内の大学に伺っているが、その都度オンライン講義用にカメラ、ノートパソコンなどを準備する必要があった。そのため、この 2 年間のコロナ禍を契機に「with コロナ」を前提に、今後ハイブリッドで講義を行うことで準備を進めているように感じた。

私が審査した会場では、コロナの影響により満足な実験や調査が行えないという限られた環境の中で、大学院生は精一杯の調査と実験を行い、修士論文をまとめ上げていることを発表内容から感じた。そのため、気がついたら、発表した 11 名の大学院生全員に質問をしていた。問い詰めるのではなく、今回の発表を通して何かを学んで欲しい、良いところ引き出したい気持で、研究目的、応用領域などについて問いかけた。しかし、回答内容から、研究の最終目標を視野に入れて回答をする者と、目の前のことに捕らわれた回答をする者の大きく 2 つに分けられるように思えた。例えば、今回の発表の中に、内藤前会長を中心に進めていたボート競技への応用の研究が、コロナの影響によりボート競技を対象に行えなくなり競泳に変更したものがあった。発表を聴いて、着想が良く、実用性もあると感じていくつか質問したが、計測方法、計測精度中心の回答しか得られず、競泳の練習に利用するという視点の回答を引き出すことができなかった。発表者は、測定方法、測定精度など与えられたテーマのみに目が向き、真の研究目的、背景、必要性まで考えが及ばなかったように思う。卒業研究や修士での研究を進める中で、このような視点が重要なことを伝えることも中大技術士会の役目のように感じた。発表会終了後に担当の先生から「学外の方からの質問は、学生の刺激になり、勉強になる」との言葉があり、コロナの影響で中断しているテクノロジー懇談会を再開する必要性を感じさせる修士論文発表会であった。

幹事会報告

行事名	開催日程	活動概要
2021 年度 第 7 回幹事会 （WEB 会議）	2022 年 2 月 25 日（金） 18:30～20:00	（１）各部会報告 ・総務部会報告 ①中央大学サポーターズ募金については、本日坂林会長が欠席で詳細が不明のため、次回坂林会長から詳細を聞く。 ②ロータリー財団奨学生（埼玉県南部に住んでいる人が対象）募集についての紹介があった。 ③NPO 地域と行政を支える技術フォーラムの 2 月の勉強会が、2 月 26 日に開催される。 ④神宮外苑の樹木伐採についての新聞記事が紹介された。 ・企画部会報告：報告事項は特になし ・広報部会報告 ①中大技術士会ニュースレターVol.53 を発行した。 ②Vol.54 を 4 月に発行する予定である。 リレーエッセイは、飯村さんに執筆を依頼している。 ③中央大学理工学部電気電子情報通信工学科教育技術員 2 名の募集が行われている。 どなたか知っている方で良い方がおられれば、紹介してほしい。 ④第 3 回の理工ホームカミングデーが理工白門祭に合わせて開催されるが、その中で本会参与で株式会社関電工 取締役社長の仲摩俊男さんに講演していただけることになった。 ・大学支援部会報告 ①講師派遣 今年から小柳さんから國友さんに講師が変わったが、手続きが間に合わないので、今年はゲストスピーカーとして講師を務める。 ②技術士ガイダンス 技術士ガイダンスは、オンデマンド動画のコンテンツ作成を行う。ビデオ作成チームを作るので手伝ってほしい。 第一次試験の合格者には、今年はコロナ禍で表彰式を行えないため、理工事務室と相談して坂林会

行事名	開催日程	活動概要
		長名で賞状を送ることになった。 合格者には記念品として定規を新たに発注し、賞状と一緒に送る。また、合格者への送付は、理工事務室で行ってもらえることになった。 （2）その他 来年度の定時総会は新型コロナの状況がまだ見えないので、10 月開催とする。10 月開催であれば、対面での総会開催が出来る可能性がある。

■ 大学支援部会活動報告

項　目	内　容
技術士第一次試験の結果	令和３年技術士第一次試験について、在学生の合格者数は 82 名。 （内訳は　学部生：74 名、大学院生：8 名） 大学別合格者数は全国 2 位であった。 令和 4 年は全国 2 位を目指し、支援活動を行う
第一次試験合格者へ賞状及び記念品の送付	第一次試験合格者へ賞状及び記念品（中大技術士会ロゴ入り定規）を送付。 今後は、毎年 3 月頃（卒業式前）に在校生の合格者表彰状（＋記念品）の授与式（仮称）を開催していく方向で調整中。

■ 広報部会活動報告

項　目	内　容
サーバー運営	サーバーの利用更新手続き実施(12 月)
ニュースレターの発行	ニュースレターvol.54 の作成、発行
ＨＰ新規掲載	①ニュースレターvol.53 の掲載 ②電気電子情報通信工学科教育技術員募集の案内を掲載
その他	来年度の理工白門祭と同時期に第 3 回理工ホームカミングデーを行う予定との情報あり。今後、詳細が開示される予定。
会員の皆様へのお願い	① 就職、転勤、転職、転居等により連絡先が変更になった場合、幹事会宛てにご一報をお願いします。詳細はホームページ「入会のご案内」をご参照ください。連絡先：toiawase@chuo-u-pej.org ② ニュースレターへの会員の皆様らの投稿をお待ちしています。近況報告、受験体験談など、何でも構いません。皆さんからの積極的な応募をお待ちします。 ③会員相互の交流を深めることを目的に比較的気楽に投稿できる「趣味」や「近況報告」を共通テーマとしたリレーエッセイを(Vol.36)より開始しました。執筆依頼がありましたら、躊躇せずに投稿をお願いします。また、リレーエッセイの投稿をご希望の方は遠慮無く、toiawase@chuo-u-pej.org まで、お問い合わせください。意外な繋がりが生まれるかも知れません。

活動計画

■ 大学支援部会活動計画

行事	日程	内容
技術士ガイダンス	5 月中旬	コロナ感染防止等、大学からの要望により「技術士ガイダンス」はオン・デマンド（動画によるガイダンス）を計画。現在、動画コンテンツ作成中。

■ 企画部会活動計画

行事	日程	内容
法曹会との交歓会	未定	次回の開催は中大技術士会が幹事担当ですが、新型コロナウイルスの影響で開催を見合わせています。開催時期については、今後の状況を見て検討を行っていきます。

リレーエッセイ

飯村信夫さんからのリレーエッセイをお届けします。

■ **「あれから、かれこれ４０年・・・」：飯村信夫（S60.3 理工学部土木工学科卒、建設部門）**

茨城県を退職して 1 年になるが、自分の公務員生活は、建設省が 9 年で、ダム、研修担当（中大２部通学）、水文研究に、茨城県の 33 年は、河川・ダム・砂防、道路、区画整理、工業団地、空港、水道事業に携わり、通算では河川関係が 20 年と最も長かった。

１．転機

高校卒業後に就職した白川ダムでの二人の先輩との出会いが人生を大きく変えることとなった。二人は、昭和 40 年代に赤羽にあった土木研究所に勤めながら、金〇氏は中大の 2 部、川●氏は東京理科大 2 部を卒業したかたで、初めのうちは、どけん出身と聞いて、仕事ができて取り組み姿勢が他の人と違うがどこの土建屋さんだろうか、と思っていた。2 氏から、大学進学のための異動も可能との話を聞き、翌年、小平の研修機関に異動し中大 2 部に入学した。職場の寮に入室の際は、初めて遭遇した数匹のカマドウマがぴょんぴょん跳ねて自分を出迎えてくれた。

中大へは、夕方、小平の職場から中央線・総武線で水道橋駅下車、徒歩で後楽園キャンパスに向かったが、巨人戦開催時の後楽園球場脇を通る際は、大歓声とオーロラビジョンの得点経過が気になり、途中入場しようかその日の授業と天秤に掛け、足が止まったこともあった。

中大卒業後、土木研究所へ異動させて頂いたが、そこで二度目の転機が訪れた。彼女の了解も得て東北地建に戻るつもりが、軽い気持ちで受験した茨城県職員採用試験の合格で彼女の態度が一変し（罠にはまってしまった）、東北地建の企画部長に心からお詫びをし、昭和 63 年 3 月に建設省を退職、翌 4 月に茨城県に再就職し彼女と結婚した。以来、東北に戻ってからの楽しみに取っておいた東北の観光地めぐりは、茨城県に J ターンしたため、いまだに達成できていない。

２．余計なこと・思い込み

平成 23 年 3 月の東日本大震災時は、茨城県河川課ダム砂防室で、がけ崩れやダムの漏水対応などに当たったが、河川課の年頭の挨拶で、「昨年、災害が無くて良い年だったのは上司の人徳のお陰」と話した 2 カ月後のことである。余計なことを言ってしまった。言葉は慎重に選ばなければならない。

令和元年東日本台風の際は茨城県河川課に勤務し、台風襲来の 1 カ月ほど前の事務所長会議で、土木部職員の災害復旧経験者減少のため災害復旧事業の活用をお願いしたが、土木部総出で対応する大災害となってしまった。ほどほどで良かったのだが、まさに「口は災いのもと」である。

中大に通い始めた頃、技術士をめざす上司の英会話に励む姿に、技術士資格取得には英会話が必須で、英会話が苦手な自分に技術士は縁遠いものと考えた。後日、趣味の英会話だったことに気付いたのは、本屋さんで技術士本を手にした 20 数年後のことである。技術士へのチャレンジは 50 代になってからだった。

気の持ちようで変わるものである。2 次試験での受験申込書の業務経歴や小論文試験は、「高度な技術力を問うもの」との考えを、「高等の専門的能力を問うもの」と解釈してからは、ハードルがだいぶ低くなった。また、働き盛りを過ぎてからの 2 次試験合格は無理だろうとの勝手な思い込みで精彩を欠いたが、県を定年退職した先輩の技術士取得は、50 代後半の自分にがぜんやる気が出た。2 次試験合格は 58 歳、平成 30 年度のことである。

３．失敗事例

砂防流路工の落差工出来形検査では高さが合わず、業者を問い詰めたところ、仮ベンチマークとしていたコンクリート境界杭上にバックホウバケットを仮置きしたことで約 10cm 沈下したことを下請け業者が白状した。治山ダムの施工実績がある下請けを連れてきたとのことだったが、仮ベンチマークの選定・保全には注意しなければならない。

急傾斜地崩壊対策事業でのフリーフレーム工法による法面工事では、モルタル吹付直前の配筋検査で設計鉄筋量の不足が発覚し、なんとか鉄筋を追加して対応したが、翌年の会計検査で受検した時には胸をなで下ろした。工事発注時には、念のため成果品を再確認したほうが良い。

工業団地造成時には、工事を行う際、希少植物に注意を払うよう園芸用ラベルを設置したが、一般人の目にも留まりやすくなり、エビネ蘭などはいつのまにか園芸用ラベルだけになっていた。希少植物は保全適地への移植など配慮が必要である。

土地区画整理事業では、造成中の宅盤で土砂堆積していた雨水排水管が豪雨により閉塞し法面崩壊をきたし、IC への唯一の接続道路を通行止めにしてしまい道路管理者にご迷惑をお掛けした。「ヒヤリハット」を見逃さず、雨水排水系統を多重化するなどリスクの低減を図るべきである。

バイパス道路整備では、バーチカルドレーン・サーチャージ軟弱地盤処理時の圧密沈下曲線が収束せず原因究明に当たったが、洪積層未固結土の圧密沈下と判断し、上げ越し対応した。また、同様の軟弱地盤処理工法で施工した別路線の法面崩壊は、軟弱地盤解析時に軟弱層下の洪積層の傾斜を把握できていなかったことが要因とされた。見えない地盤状況の把握は難しいことから、想定と異なる挙動を早期に察知し、状況によっては有識者に意見を求めることをお勧めしたい。

４．お陰様で

平成 8 年の頃になるが、高速道路の雨水排水で準用河川への流域外放流が問題となったため、

各都道府県に照会し、中小河川への雨水排水時の調整池設置を義務付けさせて頂いた。道路公団には負担を掛けたが、ご協力頂いたお陰で、防災・減災に有効だったと考えている。

令和元年の東日本台風災害の時には、国土交通省からリエゾンやテックホースを派遣頂き、国との迅速な情報共有やアドバイス、緊急排水などの支援を頂き、円滑な復旧対応につながった。

あれから、かれこれ 40 年、中大で単位取得が難関だった当時の N、M、K 教授を始め、これまでにお世話になった多くの方々に改めて心から感謝申し上げます。

自分は現在、茨城県土地開発公社・(公財)茨城県開発公社に勤務し、直轄道路・河川事業の用地取得や工業団地の造成などに携わっているが、公社では茨城県北部沿岸にある「鵜の岬」という公共の宿泊施設の管理運営も行っている。故郷、白川ダムの水没林も人気だが、全国の国民宿舎のなかで 32 年連続して宿泊利用率 1 位の人気の宿である。自然や食材豊かな茨城県へのお越しも期待したい。

つたない本文が、読んでいただいた方の話のタネ、何かの参考になれば幸いである。

次号のリレーエッセイは村尾地研技術顧問の浅井誠二さんにお願いいたします。

投稿エッセイ

中大技術士会幹事の山下さんからの投稿エッセイをお届けします。

創作昔話「新田開発骨折り物語」始まりー始まりー

中大技術士会幹事 山下 三雄さん
（建設部門・総合技術監理部門―いずれも「都市及び地方計画」科目）

昔々安芸の国のある山里に村の長者様たちの寄り合いがあったとさ。

長者 A「さあて、おらんちの村さ田んぼが少ないけん、山さ切り開いて田んぼをこしらえたらどげんかのう？」

長者 B「そんなら街道にも近おし長者山がええのう。」

ってなわけで話がどんどん進み、山の持ち主のほとんどの同意を得て、お代官様に相談に行くことになった。

お代官様「そりゃーええ考えじゃ。」

長者 A「でお代官様、田んぼの取り分の話じゃが、長者山には「縄伸び」がようけえあって、これをどう分けるか困っておるのじゃが、どうじゃろか田んぼが仰山できれば年貢も増えることじゃし、ここはひとつお上のお情けをいただけんじゃろか。」

お代官様「いんや街道を拡げる話があってな、街道沿いの替地が入用なのじゃ。じゃけんなかなか難しいのじゃがな。」

長者 A「んでもわしらはわしらの手で田んぼをこしらえるのじゃし、お上の金すを頂戴しようとはこれっぽちも考えていねえし、それにそもそもあの山さもともと里の山だったものをお上に献上したものじゃろうが、そこんところちいと考えてもろうて、ちょっと手心をつけてもろうてお情けをいただけんじゃろか。」

お代官様「それがなかなか難しいのじゃ。長者さんたちの気持ちも分かるが、藩の勘定奉行や老中たちがうるそうてのう。なかなか新田開発の許し状は出ないと思うんじゃが。」

さーて長者様たちは困ってしまって里に帰ってまたまた寄り合いをしたそうな。

長者 B「山を切り開くにはお上の許し状が出んとどげんにもならんしなあ。あーこんなときお江

戸にいる大岡様とかいうたいそうお情けに厚いお奉行様がわしらの藩にもいたらええのじゃがなあ。まあお許しが出ななーんもできんけん、お上のお情けは望まぬことでしょうがあるまいなあ。」

長者 A その他一同「そうじゃなあ。」

ってなわけでやっとお上の許し状を戴いて山が開かれたそうな。

越後屋（あきんど）「そらお代官様もなかなか頭がよろしいおますな。」

お代官様「越後屋、おぬしほど悪賢くはないわな。まあ御用金もびたー文使わんで※田んぼもきっちりもろたし年貢も増えるわ、一石三鳥ってなもんや。こんでわしの株もあがるというもんや、はっはっは。」

（ここでいつもなら水戸のご老公様の葵のご紋の印籠のご登場となるのですが、ご老公様このときあいにく東国をご漫遊中であったとのこと。あー、めでたくなし、めでたくなし。）

※本事業は通常の補助金等を一切導入せず、したがって税金は 1 円たりとも使っていません。

（脚本　村葉**冬**子）

（お断り）

この昔話は勿論フィクションで、実在する人や団体とは全く関係ありません。念のため。

（本物のテレビドラマ「水戸黄門」の作者であり監督でもいらっしゃいますペンネーム「葉村彰子（はむら**あき**こ）」氏は本事業の地権者の関係者でもあられ、私もご同意をいただきに京都のホテルでお会いしたことがあります。）

私が 30 代の働き盛りのころ、広島でプロジェクトマネージャーとして経験した大規模都市開発事業（開発面積約 120ha、総事業費約 500 億円の組合施行の土地区画整理事業）において、認可権者である広島市と地権者有志で組織した組合設立準備委員会との間で確執が生じました。

本事業の特徴の一つとして測量増が 36.0%と非常に大きく、そのかなりの部分が広島市所有地で、この取り扱いを巡っての確執です。測量増が大きくなった原因は、この土地はもともと旧瀬野川町が広島市に合併した際に移管されたものであり、町時代にその一部の入会権を消滅させるために実測面積で関係地権者に分筆し所有権を移転させたため、残った土地の測量増が非常に大きくなったものである。合併時に旧瀬野川町と広島市との間で本事業を推進することを（口？）約束していたのであるが、肝心のこれに関する文書は見つかりませんでした。

この測量増の取り扱いを巡って行政との折衝を続けたのであるが、最終的にはほぼ全面的に準備委員会の敗北に終わったものである。やはり認可権者の権力の壁は大きいものと感じざるを得ず、行政は地権者の立場ではなく庁益を最優先させたのである。（見方を変えれば旧瀬野川町民だけではなく、広島市民全員のトータルの利益を優先させたと考えることもできるが）ここでも地権者の立場に立ってものを考えるという合意形成のポイントが無視されました。

もっとも準備委員会の会長が先鋭的な革新系の人で（以前国鉄の有力な労働組合のリーダー的存在で、ストライキでたびたび列車を止めた経験の持ち主であった）、行政に対して論理としては妥当性があるがなかなか実現の難しい様々な要求を突き付けていたので、「江戸の仇を長崎でとられた」と考えるのは筆者の偏見であろうか。当時広島市ではアジア大会が予定されて、その会場が西部の丘陵地にあり（「西風新都」と称していた）、その付近では地元出身の大手ゼネコンや中央の大手不動産会社等の大規模開発事業が目白押しで、それに伴うインフラ整備に多額の税金が投入され、同じ都市計画税を払っているのに、本事業地のある東部地域は全く顧みられず、不公

平感がマグマのように溜まっていました。これを地元出身の市議会議員の方は「西高東低」と揶揄していました。

本創作昔話は本事業の竣工時に組合が編集した開発記念誌「みどり坂開発の歳月」※に載せた筆者のせめてもの抵抗を試みたものである。関係者の一部もすでに亡くなられた方もおられ、20年近く経過し時効？が成立していると考え、生存者の方がたのうちには一部お耳に触ることがあるかと思うが、「負け犬の遠吠え」としてご寛容いただければ幸いであると記述しておきました。
※この巻頭には皮肉にも？当時の広島市長、建設省から出向されていた助役、地元選出の市議会議員でもある広島市議会副議長の祝辞が寄せられています。

（追伸）

私の不徳の致すところにより 4/14 に 37.5℃の発熱及び咳があり、かかりつけの医師のところで抗原検査をしたところコロナウイルスが陽性と判断され、この 4/24 までの自宅待機を余儀なくされました。パルスオキシメーター（POM）で測定した血液中の酸素濃度も一時は 94％まで低下しました。（96%以上が正常値です）糖尿病の基礎疾患があることを強調して特例承認の飲み薬「ラゲブリオ」の処方をお願いし、これによって回復した模様で、現在は平熱で POM も 98%の正常値に上がって体調も至って良好です。皆様も 37℃以上の発熱があったらすぐに医療機関に行って検査を受けてください。万一陽性の場合は飲み薬の処方をぜひお願いしてください。私も最初は単に解熱剤と咳止めしか処方されませんでしたので、注意が必要です。